

中日両語の対照研究

「題述関係を中心に」

潘志堅

一、序論

語順から見れば、中日両語の文構造は多少異なっている。中文では主語―述語―対象語（SVO構造）であるのに対して、日文では主語―対象語―述語（SOV構造）であり、中文の構造がかえって英文のそれに相似しているようである。例えば、

（中）我^s正在^v讀書^o。

（英）I^s am^v reading^o a book^v .

（日）私は本^sを^o読んで^vいる。

それは単に文を分析した方法の一つだけであって、それによって中国語の文構造は英語のそれに似ていて日本語のそれと異なっている、と断言することはできない。

三上章氏は、日本語の中には主語がなければならないことは

ない、と判断を下しており、それは中国語のそれとちやうど一致しているようである。例えば、次の例文を「主語+述語」と分析するよりも「主題+説明」と分析したほうがましだと思われる。

（a）剛才^{△△}做過運動。

（日）さっきは運動をしました。

（b）運動^{△△}剛做過。

（日）運動はさっきしました。

面白いことに、中日両語には同じく「主題」があり、文を分析して得た主な成分も非常に類似しているようである。それ故、「題述関係」から中日両語の文構造を比較する必要もあるのではないかと考えている。

二、主題と説明

三上章氏によると、日本語では動作主を表わす主格が認めら

れるが、欧米人のいわゆる主語 (Subject) ・述語 (Predicate) という主述関係はないと指摘している。そして、その代りに、「主題+説明」という題述関係が文中によく見られるという。

中国の文法学者でも、文を主・述と分析するのが殆んどだが、そんな分析法はあまり適当だとは断言できない。それは論理性に欠いているのだからである (註1)。むしろ、文を主題と説明に分けた方がもっと合理的だと思われる。

ところが、中日両語では同じく主題があるとはいえ、主題をつくるのにどういう標識があるのか理解しておかなければならない。それを(一)で論じたいと思う。

日本語では、「格助詞」によっていろいろな「格」を表示することができ。しかし、「格」を主題化すれば、格助詞は「主題標識」に転じなければならない。それに対して、中国語ではそれをきっぱり区別する為の「助詞」がないので、語順による外はない。では、中国語に「主題化」という現象があるのかあるとすれば、どういうふうに主題化していくのか。日本語のそれと同じなのか、それらを第三節で論述してみたいと思うのである。

(一) 主題・主格・説明・述語

国語大辞典によれば、「主題」は芸術用語としても、表現の中心となる話題・内容・問題・思想としても、文法用語としても用いられるという (註2)。松下大三郎氏が「題述関係」の先駆者なので、先ず松下氏の主題の定義を見ることにする。

△題目語は提示的修用語の一種であって思惟作用に於ける判

断の対象を提示するものである。(松下氏は主題を題目語と称している。)

松下氏が「題述関係」の論説を提出して以来、佐久間鼎や三尾砂や三上章などがそれを受け継いで発展させてきたが、主題に対する定義は松下氏のそれとはあまり違わないようである。

それに対して、中国文法では、討論の対象となるものを「主題」だと定義する者もいるし、非主格の名詞が文頭においてあるのを「主題」と定義する者もいる (註3)。

中日の文法学者の「主題」に対して下した定義は決して同じものではない。だが、主題が判断の対象を提示するものだというところで、いくらか類似点が見られるであろう。

ところで、「主格」の定義はそれほどやさしいことではない。日本語教育事典では、表現形式や意味的側面から「主格」の定義を下しているが、「主題」と混淆されたところがある (註4)。そして、三上章の規定しているように、「Nが」を主格とするのにも通じない場合がある。たとえば、

△私はお金が欲しい。

△私は着物が買いたい。

「お金が」と「着物が」は皆「Nが」のタイプだが、果して「主格」と認められるべきか (註5)。便宜上、筆者は動作主である「Nが」を主格とし、動作主でない「Nが」を他格とする予定である。

中国の文法では、主格を「述語の前にある動作主」だとか、「述語の行為や存在の関係を維持する為の名詞節」だとか定義している。

それから、説明と述語の定義を見ることにする。

文字通り「説明」は主題についての説明、解説である。そこで、「説明」の中には「主格」も「述語」も「修飾語」も入っているの、文を分析するのにしにくいところがある。その為、この論文では「説明」を使わないで、その代りに「述語」をとりたと思う。

国語学研究事典では次のように述語を定義している（註6）。

△文の成分の一つ。係ってくる種々の成分を受けとめ、その文の主体の動作・作用や性質・状態・関係などを説明し、文を成立させる成分。

それに対して、中国の文法学者は「述語」のことを「謂語」とか「止詞」とか称しているが、中日両語を対照しやすい為に、便宜上「主体の動作・作用や性質」などのことを「述語」と統一してもらいたいのである。

三、主題の標識

主題を提示する為の標識は一体どのぐらいあるのか。いくらそろえても完全にそろえ尽すわけにはいかないであろう。「象は鼻が長い」では、三上章氏が「ハ」を主題の主な標識として、それ以外の標識を「ハの周囲」としていているが、それをまとめてみると次の通りである（註7）。

1. 「メハ」型：

(1) 代行型：

X（が・を・の・に）↓X「ハ」

(2) 添加型：

2. 条件型：

X（に・へ・から・と・で・として…）「ハ」
X（なら・だったら・だと・では・でも）

3. 「Xモ」型：

(1) 代行型：

X（が・を・の）↓X「も」

(2) 添加型：

X（に・へ・から・と・で・として…）「も」

4. 「X」型と「X、」

日本語における主題の標識は前述のようにいろいろな形式で表わせるが、中国語では、はっきりとした標識が見つからないので、「主格」と混淆されやすい。

ところで、S. Thompson は主題の形式上特性（標識のこと）について説明したことがある。Thompsonによると、主題が必ず文頭にあること。そして、「暫止」或は暫止記号によって提示され得るといふ（註8）。

それで、中国語における主題の標識とは何かというと、はっきりしたものではない。それを強いて言えば、次のようにまとめてみることもできるであろう。

(1) 「、」或は暫止記号。

(2) 文頭に移されること。

(3) 既知となること。

(三) 格の主題化

日本語には格が何種類あるのか、文法学者によって異なっているが、次のように分類されることが多いようである。

1. 主格：N「が」
2. 対格：N「を」
3. 与格：N「に」
4. 奪格：N「から」
5. 共格：N「と」
6. 位格：N「に」とN「を」
7. 具格：N「で」
8. 原因格：N「で」
9. 属格：N「の」

ところで、それを「説明」の主題として提示しようとするれば、右に述べた諸格が主題化して主題となってしまう場合もある。

前にも述べておいたが、主格や対格や属格の有題化に当たっては格助詞を削除するのが殆んどだが、他の格が主題化したら「ハ」などの標識を付加する。そして、「時格」が主題化する場合にも、「ハ」などを添加するのが普通である。

日本語ではCaseを「格」と訳するのに対して、中国語では普通「位」と称しているようである。黎錦熙氏は名詞の「位」を次のように分けている（註7）。

1. 主位：主格となるもの
2. 賓位：対格となるもの
3. 補位：補語となるもの
4. 領位：形容詞の付加語となるもの
5. 副位：副詞の付加語となるもの
6. 同位：上の「位」と同じ地位に立つもの
7. 呼位：呼び掛け語みたいな独立成分であるもの

中国語には格助詞がないので、*Case*を表わすのは語の位置による外はない。それで、日本語の「格」に相当する「位」は実に語の「位置」をさしているのである。たとえば、主位としては、文の主な位置で文頭に立つ「位」を指すのである。賓位も文字通り「来賓」席（位）を指しているもので、述語の後に置いている「位」である。

中国文法では、「位」の主題化ということがあまり言及されていないが、それを試しにまとめてみると、次の通りである。

1. 文頭に移されることによって主題化するもの
- 主位・賓位・副位・同位
2. 暫止記号によって主題化するもの

領位

3. 主題化する必要のないもの

呼位

4. 主題化しにくいもの

補位

四、題述文

三上章氏は、主題のある文を題述文と称しているが、主格を「述」部から抽出して、題述文をさらに題主述文（主格のある有題文）と題述文（主格のない有題文）に分けてもらいたいと思う。

題述文を公式的に分類してみると、「AはBだ」と「AはBする」という類型に分けている。それは日本語を中心とした分類法だが、それと対応しながら中国語の類型もまとめてみたい

と思う。それぞれ(一)と(二)で論述することにする。しかし、^新の関係上、中日両語の異同点は第三節に譲って、ここでは省略する。

(一) 「AはBだ」型の文

奥津敬一郎氏が「うなぎ文」の論理性を発表して以来、日英語における文構造の対照研究を再検討するようになった。「僕は鰻だ」を英訳してみたら、「I am a eel」となり、明らかに文が通じないのである。こういう「題述文」は日本語だけではなく、中国語でもちゃんと存在している。日本語のそれと同じように、「要吃什麼呢？」（何にしましょうか）と質問されると、「我（是）牛肉麵。」（僕は牛肉メンだ）と返事するのがある。

紙幅の関係で名詞文も形容詞文も形容動詞文も一括して「AはBだ」としているが、本節では名詞文と形容詞文との二種類に分けて論じたいと思う。

1. 名詞文

名詞文には有題文が圧倒的に多いようである。「話しことばの文型」でとりだした名詞文にはいろいろな類型が見られるが、「AはBだ」に相当する題述文をまとめてみると次の通りである。

A（は・も・なんて・って・だって・として・なら・ゆ）
Bだ。

Aが「主格」から主題化されたものなら、意味的に主格と同源だと認めてもいいが、「他の格」からの主題だとすれば、「では主格は」という疑問にぶつかりあいかねない。

ところで、中国語の判断文には、「AはBだ」というようなパターンが見られる。「基本文型」としては、楊富森氏が「AはB」という文型をとりだしているが、日本語のそれと大変似ているようである（註10）。

中国語は孤立語なので、主題を提示する為の「助詞」がないが、「是」の前に「修飾語」を入れたりして別類型の題述文をつくることもできる。たとえば、

A（也・都・還・就・才・不……）是 B

2. 形容詞

形容詞文も「AはBだ」型の文が殆んどだが、「aがbだ」という無題文もいくつかあるようである。たとえば、

△しっぽが長いかしら

△すこしむした方がいんじゃないの。

ところで、中国語では形容詞を述語とする文もあるが、楊富森氏がそれを「描写型」と称している。それをまとめてみると次の通りである。

(1) A（很・非常・相当・比較・比……・越加・ゆ）B（的）
(2) A（像・大概・不）是 B（的）

(二) 「AはBする」型の文

前述のように、名詞文と形容詞文は「AはBだ」型の文が殆んどだが、場合によって無題文になるものもある。それと同じように、動詞文には主題化されたものもあれば、主題化されていない無題文もある。「話しことばの文型」でとりだした動詞文をまとめてみると、次のような有題文と無題文が見られる。

有題文：A（は・も・って・だって・なんて・ゆ）Bする

無題文：aがbする。(bする)

もちろん、動詞文における有題・無題のことはそう簡単に説明できることではない。既知のもの(こと)を主題とするのは当たり前だが、どんなものが既知になるか未知になるか判明しにくいものもある。そういう場合には、野田氏のとりだした「動詞が意志的であるかそうでないか、予想しやすいかしやすくないか、或は総体的であるか個体的であるか」などの手法によらなければならぬであろう。

ところで、日本語のそれと同じように、中国語にも主格のない題述文が多く見られる。しかし、主題と主格が重なる場合もある。前にも述べたように、既知のものを主題とするのは間違っていないが、それを区別しにくいものもある。そういう場合は、外の判明特徴(主題標識)によらなければならぬだろう。讃井唯允によれば、「、」という標識をつけるかつかないか有題文と無題文に分けられるという(註11)。たとえば、次のような文例である。

(1) 老李是學生會主席。(述語文)

(2) 老李(、)是學生會主席。(題述文)

それから、主題となるものは主格からだけでなく、対格や位格や時格などが主題化されてきたものもある。S. Thompsonがそれを「主語のない文」と称している(註12)。たとえば、

△房子造好了。(家は造りました)

△這個題目最好不要提出來。(このテーマは出さないほうがいい。)

右の文には主題があるが、主格がなかなか見当らない。しか

し、主格がなくても、完全な文である。そこで、中国語でも主述関係よりも題述関係を重要視するのである。

(三) 中日両語の異同点

1. 同点

- (1) 両語とも「主題」+「述語」という語順である。
- (2) 主題は必ずしも主格と一致するとは限らない。
- (3) 主格のない文或はあいまいな文がかなり多い。
- (4) 両語とも「零記号の主題標識」がある。
- (5) 主題は必ず既知のものである。

2. 異点

中	日
(a) はっきりとした標識がない (b) 名詞文と形容詞文は有題文となる傾向があるが、動詞文としては、「下雨」とか「來了・一個人」とかいう無題文も見られる。	(a) 「ハ」「モ」というような主題標識がある。 (b) 動詞文には有題文も無題文もあるが、野田尚史の指摘したように動詞が意志的或は予想しやすくて総体的であれば有題文となりやすい。
(c) 「経験」をあらわす動詞文は題述文である。	(c) 日本語では「経験」を表わす文は題主述文である。

五、題主述文

本章も前章と同じように、述語の品詞によって「Aはbがcだ」(名詞文と形容詞文と形容動詞文)と「Aはbがcする」(動詞文)との二節に分けているが、場合によって同じ「Aはbがcだ」型でも「題主述文」と「題述文」という二種類の文構造となる可能性がある。この章では「題主述文」を論ずるのが主な目的で、「題述文」を詳しく述べる余裕がない筈だが、両語における「題主述文」と「題述文」との混淆しやすいところを説明する為、「題述文」を全然とりださないわけにはいかないのである。最初に、「Aはbがcだ」型の文を見ることがしよう。

(一) 「Aはbがcだ」型の文

「話しことばの文型」では「題主述文」も「二重題目の文」も「二重主格の文」も区別なく「主・主・述」という類型に帰しているが、「題主述文」を抽出してまとめてみると、次の通りである。

A(は・も・って・には……) b(が) cだ

主題の標識は「ハ・モ・ッテ……」であるのに対して、主格の標識は「が」だと分かっているが、「bが」は必ずしも「主格」ではなく、「対格」となる場合もある。柳原伊織氏によれば、こういう「Aはbがcだ」型の「題述文」における「bが」が対格であるとされるのは、「cだ」の位置に「A」に当たる人の主観的な感情・欲求・判断や感覚や能力・巧拙を表わす形容(動)詞が来る場合であるという(註13)。たとえば、

「哀れだ・有り難い・いじらしい……」などである。

中国語にも、主観的な感情形容詞があるが、そういう形容詞は動詞として使われることもある。たとえば「Aはbが好きだ」という意味を表わすのに中国語では二種類の文構造が見られる。たとえば次の例文である。

1. A喜歡b。(Aはbが好きだ) (題述文)

2. b(は)A是喜歡(的)。(b(は)Aは好きだ) (題主述文)

動詞文では「b」が「喜歡」の対格であるのに対して、形容詞文では「A」が「喜歡」の主格である。それで、中国語にも「題述文」と「題主述文」とは混淆しやすいところが見られる。

(二) 「Aはbがcする」型の文

前にも触れたように、「象は鼻が長い」とかいう文型の研究で、文には「題主述文」があるのが明らかになっているが、それは形容詞文や名詞文だけでなく、動詞文が「題主述文」になるものもいくらかあるようである。たとえば、次の文例である。

△菊子(は)今はじめて氣(が)ついたのか。(川端康成「山の音」)

△ぼく(は)ますます腹(が)たってきて、……(佐藤春夫「わんぱく時代」)

でも、次の二文は意味が類似しているが、それぞれ「題主述文」と「題述文」に分けられているようである。

1. それ(は)父(が)買ってくれました。

2. それ(は)父が買ってくれたのです。

ところで、中国語にも「題主述文」と「題述文」との混淆さ

が見られるようである。しかし、それは文自身の「混淆さ」よりも、学者立論の相違による「混淆さ」といったほうがいいかもしれない。たとえば、

1. 世界上有這樣可愛的人嗎？

(世の中に)はこんなに可愛い人がいるのか。)

2. 家裏來了一位稀客。

(家には)珍しい客が来た。)

3. 今天下了一陣大雨。

(今日は)雨がざあざあ降った。)

右の文を「主語・述語・賓語」と分析する学者が大分いるが、「世界上」と「家裏」・「今天」は主語でも主格でもなく、主語であり、「人」と「稀客」と「大雨」は動詞の「主体」なので、文末に移されても「主格」と認められる。それらの文は「題述文」と見られるようだが、実は「題主述文」である。そして、それらの文を日訳しても、やはり「題主述文」となる。

(一) 異同点

1. 同点：

(1) 文には主題と主格が同時に存在する。

(2) 「題主述文」と「題述文」には混淆しやすいところがある。

2. 異点：

六、無題文

この論文では「文の有題・無題」という基準にもとづいていくつかの文型をまとめてみたが、有題文をさらに題述文と題主述文、無題文を無題主述文と述語文に下位分類したのである。題述文と題主述文は前にも述べてきたが、この五では無題文を「無題主述文」と「述語文」との二項目に分けて論述を進めたいと思う。最初に、「無題主述文」を見ることにしよう。

(一) 無題主述文

三で既に述べたように、名詞文は殆んど「題述文」であるが、

日	中
(a) 語順は、題＋主＋述という ようなものである。	(a) 題＋述＋主という語順で ある。(「題主述」もある)
(b) 同じ意味の文が自動詞であるか他動詞であるかによって、「題主述文」にもなれば、「題述文」にもなりうる。	(b) 中国語では、自動詞が他動詞に転向することはないが、「你會英語嗎？」(あなたは英語ができますか。という題述文の対象語が主題化したら「你英語會嗎」と「題主述文」になる可能性もある。

「哪一位是學生呢？」（どなたが学生ですか）と聞かれたら、「我（就）是學生」（私が学生です）と「無題主述文」で返事しなければならぬであろう。その外形としては「題述文」のように見られるが、意味的には「無題主述文」と認めるべきである。

ところで、日本語における「主格」は「が」という標識で表わさなければならないというが、前にも述べたように「bが」は必ずしも「主格」を表示するとは限らない。たとえば、次の文は表面的に「無題主述文」に見られやすいが、実際は「述語文」である。

1. という（気・感じ・味）がする。 （感覚）
2. b が（欲しい・食べたい） （欲求）
3. b が（できる・話せる） （能力）
4. b が（好きだ・嫌いだ） （好悪）

それに対して、中国文法では、主格となるものが必ずしも述語の前に来ると限らない。次のような「主述倒置」の文構造もたまたま見られる。

1. 來了一位客人。（客がやってきた）
2. 刮風。（風が吹く）
3. 有問題嗎？（何か質問《が》ありますか）

(二) 述語文

「雪国」では川端康成が「国境のトンネルを抜けると雪国であつた」という「述語文」を文の発端として述べている。そういう文における「動作主」とは「誰」「何」を指しているのかはつきり述べていないが、それは読み手が分かっているのだからという気持ちで省略されたのかもしれない。

命令文は「述語文」となる筈だが、「b から 言って下さい」「b から 叱って下さい」における「b から」は表層構造では「主格」とならないが、深層構造では「b が」と一致しているようである。

ところで、中国語にもそういう「主格のない文」がかなり多いようである。たとえば次の文例である。

1. 請坐。（どうぞ 腰掛けて下さい）
2. 來吧！（来なさい。）
3. 怎麼不買呢？（どうして買わないの）

右の文は「主格なし」の「述語文」で表わすのが普通だが、それを次のように、「主述文」と取換えても間違っていないであろう。

1. 你請坐。
2. 你來吧。
3. 你怎麼不買呢？

「省略の法則」では、三上章氏が、「主格のない」文型をいくつかに分けて述べているが、その中から「述語文」を抽出してまとめると次の通りである。

1. （時・事・物・態…）＋である。

△「おしだ」

△「いやですね。」

2. （時・事・物・態…）＋（に・と・の）＋なる

△（どうにでもなれ）

△よく なってからさ。

(三) 中日両語の異同点

1. 同点:

- (1) 「無題主述文」と「述語文」は両語にもちゃんと存在する。
- (2) 「題述文」と「無題主述文」との間には混淆しやすいところがある。
- (3) 「時・事物・態」である。(日)
是「時・事物・態」。(中)

2. 異点:

日	中
(1) 「無題主述文」は「aがbだ」bするVという型の文が一般であるが、「aがー」型の「述語文」もたまにみられる。	(1)' 「無題主述文」は「主述」という文構造だが、「刮風」「下雨」という「倒置の無題主述文」もたまにみられる。
(2) 命令文は「述語文」となるのが殆んどである。	(2)' 命令文は「述語文」となるのが普通だが、「無題主述文」となるものもある。

六、結 論

「主題」があるかないかによって、文を「有題文」と「無題文」に分けることができるが、それをさらに、「題述文」と「題主述文」と「無題主述文」と「述語文」との四パターンに下

位分類することもできる。しかし、「あら」とか「ほら」とかいう「一語文」は完全な文とはいえるが、以上の四文型にはなかなか入れにくいようである。それは一語文が「題述関係」と縁がないのであろうか、面白いことである。

それに対して、中国語にもそういう「一語文」があるようである。しかし、それは日本語の一語文とはちょっとずれがある。たとえば、次のような「述語文」と認められやすい「一語文」もある。

(1) 多美麗的鮮花! (是)b!

(なんとも美しい花よ。) b(だ)

(2) 火! (是)b!

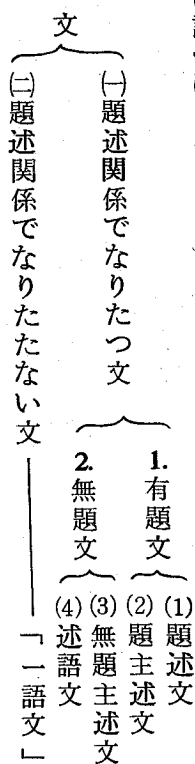
(火だ!) bだ

(3) 秋天的早晨 (是)b

(秋の朝である。) bである。

右の「一語文」は「是b」型の述語文とちよつとずれているが、そういう「一語文」には具体的な「説明性質」と陳述性が備わっているので、それを「述語文」の変形だといってもいいの、と考えられている。

ところで、文を分類しようとすれば、まず、「題述関係」でなりたつ文となりたない文に分けるべきである。それを公式に記せば、次の通りである。



もちろん、この論文でとりたてた「四大文型」は、中日両語の文構造を対照する為につくられたもので、それは唯一の最上分類法だとはあえていえない。でも、両語における文の特質をもっと理解しようと思えば、文をいくつかのパターンに分けて論じなければならない。そしてそういう「文型」をまとめることによって、「外国語」も習得しやすくなるのであろう。

《註 釈》

1. 例えば、「這本書已經看過了。」(この本はもう読みました。)における「這本書」は文頭語であって「主語」だと見られやすいが、実際には述語の主体ではなくて、対象語である。それで、そういう文を「主(主格)・述(述語)」と認めては理屈に合わないものである。

2. 国語大辞典四八八ページを参照。

3. 湯廷池『国語変形語法研究』や胡百華『華語的語法』などにおける主題に対する各定義を参照。

4. 『日本語教育事典』では、「aが述」型の文も「Aは述」型の文も「主格のある文」としているが、どちらが「主格」なのか「主題」なのか全く判明できない。

5. 意味的側面から見れば、「お金」も「着物」も文の主体ではなくて、客体である。それで、表層構造では、「お金が」とか「着物が」とかいう形態が見られるとしても、それらを主格だと認めてはならない。

6. 国語学研究事典一八一ページを参照

7. 三上章『象は鼻が長い』第三章『ハの周囲』一五六―一七

九ページを参照

8. 『語言学論集―理論・応用及漢語法』一三〇ページを参照
9. 黎錦熙『国語文法』第四章『実体詞的七位』を参照
10. 方師鐸『国語結構語法初稿』一十七、楊富森の十五個基本句型」では「是型」という文型がとりあげられているが、それはいわゆる判断文のパターンである。
11. 『人文学報』(都立大)一一二(一九七六・三)讚井唯允「中国語文法の機能概念(I)―文の「主題」をめぐって―」を参照

12. Sandvaa Thompson『Mandarin Chinese』黄宜範訳「漢語語法」九二―九三ページを参照

13. 国語学論説資料一二・三・柳原伊織『「象は鼻が長い」再考』を参照

《参考文献》

1. 松下大三郎著

『標準日本文法』 大正三年

『改撰標準日本文法』 昭和三年

『題目語及び其の材料』(七七二―七八一ページ)

『題目語』

2. 佐久間鼎著『現代日本語法の研究』 昭和十五年

3. 山田孝雄著『日本文法学概論』 昭和五年

4. 三上章著

『現代語法新説』「第三章名詞―格とは何か」 昭和四十七年

『現代語法序説』「主格・主題・主語」 昭和二八年

『続・現代語法序説』 昭和四七年

『文法小論集』 昭和五四年

『象は鼻が長い』 昭和三五年

『日本語の論理』 昭和五六年

5. 久野暉著

『談話の文法』 昭和五三

6. 『国語学論説資料』 八・三

「日本語の『主語』についての一考察」

7. 三尾砂著『話しことばの文法』 昭和三三年

8. 柳原伊織著『国語学論説資料十三・三』

「『象は鼻が長い』再考」

9. 野田尚史著

『国語学一三六集』 昭和五九年

「有題文と無題文―新聞記事の冒頭文を例として」

10. 『話しことばの文型と対話資料による研究』

11. 『日本文法事典』 昭和五六年

12. 『国語学研究事典』 昭和五二年

13. 『国語学辞典』 昭和三十年

14. 『日本語教育事典』 昭和五七年

15. 胡百華著『華語的句法』 昭和五九年

16. 湯廷池著『国語語法研究論集』 昭和五四年

17. 香坂順一著『現代中国文法』

18. 方師鐸著『国語結構語法 初稿』 昭和五四年

19. 讀井唯允著『人文学報都立大一九七六・三』

「中国語文法の機能概念と文の『主題』をめぐって」

20. S. Thompson 著・黄宣範訳『漢族語法』

21. 趙元任著・丁邦新訳『中国語的文法』 昭和五五年

22. 黎錦熙著『国語文法』 昭和五三年

23. 許世瑛著『中国文法講話』 昭和五五年